

通訳クラス受講生たちの意識調査 ～2007年度実施・通訳教育分科会アンケートより～

田中深雪¹ 稲生衣代² 河原清志³ 新崎隆子⁴ 中村幸子⁵

(¹大東文化大学 ²青山学院大学 ³立教大学大学院 S ⁴東京外国語大学 ⁵愛知淑徳大学)

はじめに

日本通訳学会が2000年に結成されてから、すでに7年の歳月が経過した。その間のわが国における通訳教育の発展は目覚ましいものがある。2005年に、学会会員有志により、「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」(染谷他2005)が実施されたが、それによると、日本国内で105以上の大学や大学院で通訳関連の授業が実施されていることが判明した。それから推測するならば、現在ではそれを上回る数の大学、大学院、専門学校などで通訳関連の授業が行われていると思われる。

しかし、それらは個々の教育機関や担当教員の手任せに委ねられており、その全体像については、なかなかうかがい知ることができないのが、現状である。実際、現時点ではその全体像が概観できるとは言い難い状況である。一体いかなる指針の下、どのような資格やバックグラウンドを持った教員が、どのような学生を対象に、いかなる授業を展開し、またどのような成果を上げているのか。明らかにされているのは、まだほんの一部に過ぎない。

幸いにも、前述の調査が実施されたことによって、通訳教育に関する基礎データが集まった。この調査では、通訳教育を担当する「教員」と、通訳の「授業」に関する詳細なデータが集まり、通訳教育研究者や教員にとって貴重なものとなった。

そこで、今回、通訳教育分科会では、通訳教育の現状をより詳しく掌握するため、前回の調査では対象にされていない、通訳教育を受ける「学生」側に焦点をあて、彼らがどのような意識を持って通訳の授業を受講しているのか調査を行った。

TANAKA, M., INO, K., KAWAHARA, K., SHINZAKI, R., & NAKAMURA, S. "Tapping into the Needs and Wants of the Students of Interpreting Classes -- From the 2007 survey conducted by the JAIS Educational SIG." *Interpretation Studies*, No. 7, December 2007, Pages 253-263.

(c) 2007 by the Japan Association for Interpretation Studies

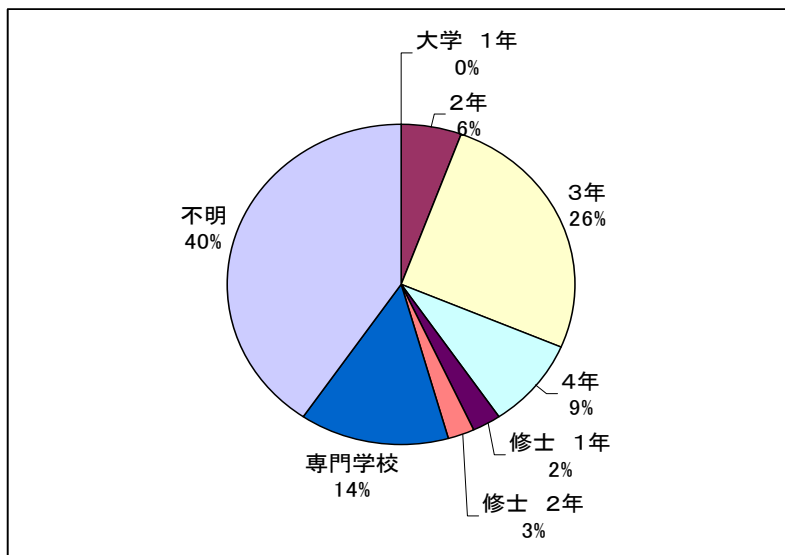
なお、日々現場で教育に携わっているわれわれ個々の教員は、それぞれの体験から学生たちの「意識」についてある程度の仮説を持っている。今回の試みは、その個人的・体験的仮説を、それぞれの持ち場を超えて、より広範囲に検証しようという試みでもある。

実施調査について

今回のアンケート実施に先立ち、通訳教育分科会では2007年3月18日に会合を開催し（於：立教大学）アンケート調査に協力してくれる会員を募った。さらに、日本通訳学会のメーリングリストを利用して調査への呼びかけを行った。その結果、全国の日本通訳学会会員の中から、大学12校、大学院2校、専門学校1校のメンバーの協力を得ることができた。なお、有効回答数は377であった。^{註)}

本調査の実施にあたっては、調査の精度と信頼性を保つため、アンケートは原則として日本通訳学会の会員であり、かつ教員であることを前提条件として調査を依頼した。さらに、実際に自分が指導している学生を対象として、教員自身が自分でアンケートを取るよう、またすべて記名式で実施するよう依頼した。アンケート結果を研究目的で使用するについては、参加者全員の同意を得た。調査参加学生の学年別内訳を図1に示す（図中、「不明」となっているのは、学年を明記せずに「大学生」と一括りに回答した者を示す）。

図1 調査参加学生の内訳



質問内容と結果

実施したアンケートの質問は次のとおりである。（詳細は資料を参照のこと）

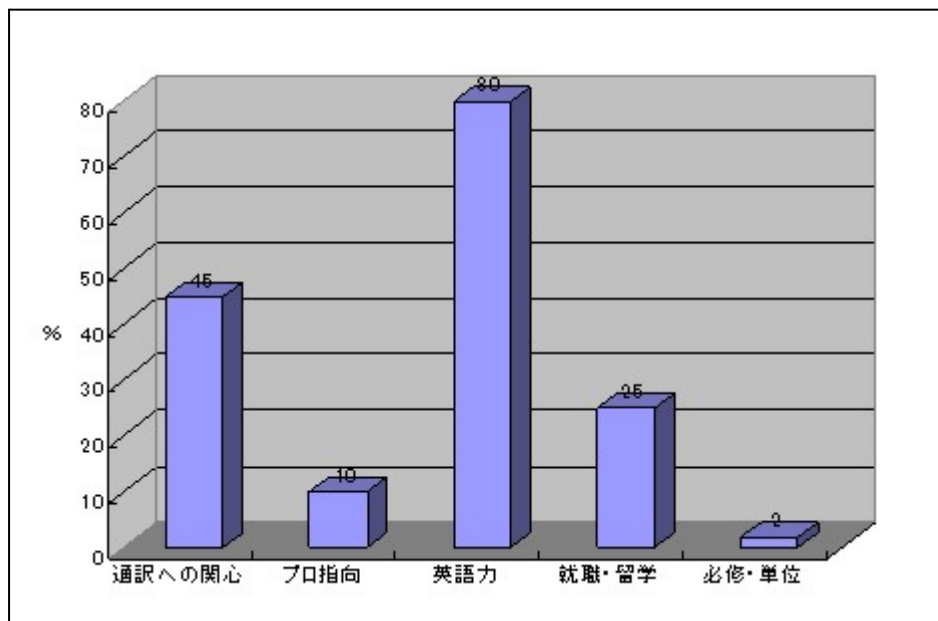
- 質問 1. 履修の理由について
- 質問 2. 現在の英語力について
- 質問 3. 英語力の自己評価について
- 質問 4. 海外在住、留学経験について
- 質問 5. 通訳訓練を受けた経験について
- 質問 6. 授業で何を学び、身に付けたいのか
- 質問 7. 卒業後の進路の希望について
- 質問 8. 他にどのような英語科目を履修しているのか

以下、各質問に対する回答結果を紹介する。

質問 1. 履修の理由について

複数回答のため、重複して回答している学生が多く見られるが、授業履修目的としては「英語力を高めたい」と答えている学生が 80 パーセントと圧倒的に多い。一方、「通訳や通訳の勉強法に関心があるから」という学生は 45 パーセントで、全体の半数に満たなかった。このことから、履修している学生の中には、一部、通訳への関心度が高い学生も存在するかもしれないが、そうでもない学生が多数存在することが明らかになった。

図 2 履修理由



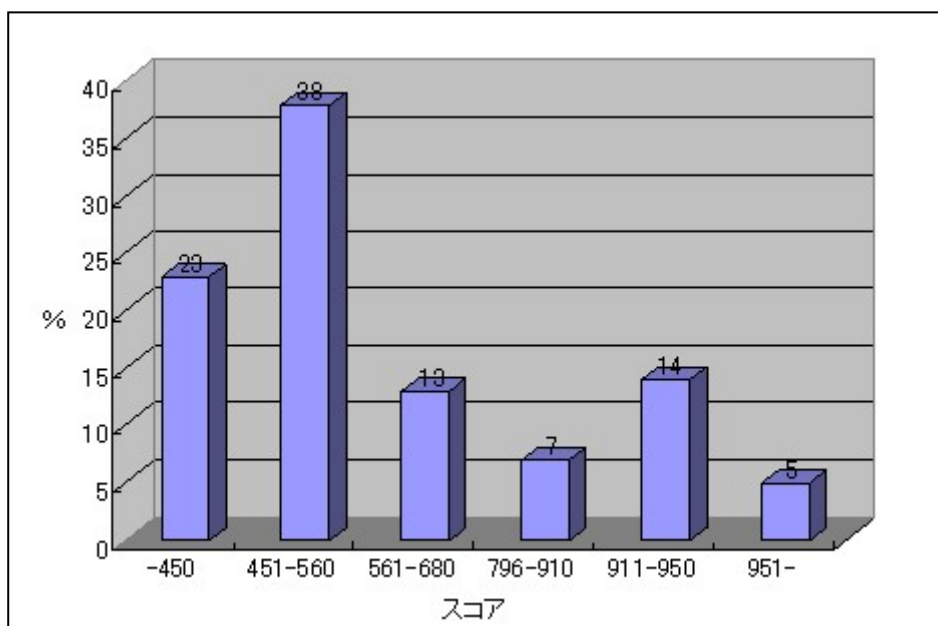
質問 2. 現在の英語力について

では、受講する学生は、一体どのくらいの英語力を持っているのだろうか。この調査では TOEIC、TOEFL、英検などの各種語学試験のスコアや取得級などで回

答してもらった。その結果、対象とする学生の語学力に大きなばらつきが目立った。これは、本調査が専門学校、大学、大学院と包括する対象が広いためであろう。

一例として、TOEIC スコアを取り上げると、多数を占めたのは、451～560 点のグループで、次に多かった 450 点以下のグループと合わせると、全体の 60 パーセント以上を占める結果となった（図 3）。一方、950 点を超える学生も 5 パーセントほどおり、911～950 点代のグループと合わせると全体の 19 パーセントが 910 点超の高得点者となっている。

図 3 TOEIC スコア



質問 3. 英語力の自己評価について

次に、学生自身が自分の英語力に対してどう認識しているのかを知るために、英語力の自己評価を尋ねてみた。その結果、「英語はとても得意」という学生が 28 パーセント、「英語はある程度の力はあると思う」という学生が 30 パーセントおり、約 6 割近い学生が、自分の英語力に多少とも自信を持っているという結果となった（図 4）。質問 1 の履修目的の



図 4 英語力の自己評価

結果と併せて考えてみると、学生としては、自分は英語が得意なので、さらに英語力の強化をはかりたいというのが、そもそもの動機となり、通訳クラスを受講する気持ちになったのであろうと推測される。

質問 4. 海外在住・留学経験について

海外在住、留学経験についての質問には、在住経験については約 8 パーセントが「ある」と回答した。留学に関しては、高校では約 5 パーセント、大学では 13.5 パーセントとの学生が経験していることがわかった（図 5）。海外滞在先や、留学先としては、米国が多数を占め、次にカナダやオーストラリアの順となっている。さらに、滞在期間については、1 年から 10 年以上に及ぶ者など、多様であった。しかし、総じて見るならば、大多数の学生が海外での生活体験を持っていないことが明らかになった。



図 5 海外在住経験

質問 5. 通訳訓練を受けた経験について

それでは実際に、通訳クラスを受講している学生は、これまでに通訳に関する授業や通訳訓練を受けた経験はあるのかどうか調べてみた。その結果、13 パーセントがすでに受けた経験があると答え、大半は過去に大学での授業などで通訳訓練を経験していた。その一方、通訳訓練を受けるのは、今回が初めてという学生が 87 パーセントもおり、圧倒的多数を占めていた（図 6）。

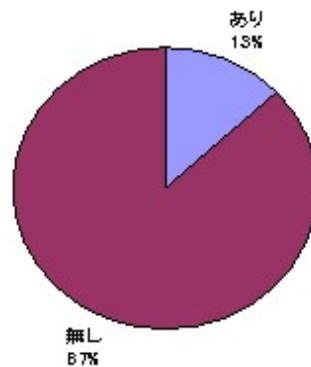
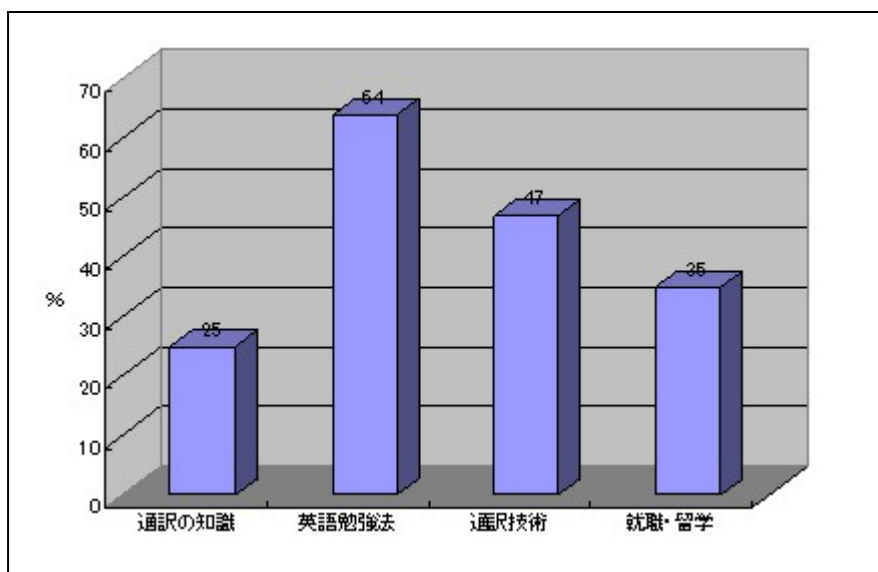


図 6 受講経験

質問 6. 授業で何を学び、身に付けたいか

次に、学生たちは通訳クラスではどのようなことを学びたいと思っているのか調べたところ、受講生の 64 パーセントが「効果的な英語の勉強法」と答えた。その一方で、「通訳技術やノウハウ」を学びたいと答えた学生は 47 パーセント、また「通訳の仕事や資格に関する知識」を学びたいと答えた学生は 25 パーセントしかおらず、就職や留学に役立つ技能の 35 パーセントより少数であった（図 7）。

図7 授業で学びたい点



質問7. 卒業後の進路希望について

卒業後の進路に関しての質問に対しては、「通訳にならなくても、英語を使った仕事がしたい」という解答が52パーセントと半数を超えた。一方、「将来プロの通訳になりたい」という学生は、7パーセント、「企業などで社内通訳になりたい」という学生は、12パーセントであった。その他の回答の中で目立ったのは、英語教員や観光関係の仕事に就きたいというものであった(図8)。

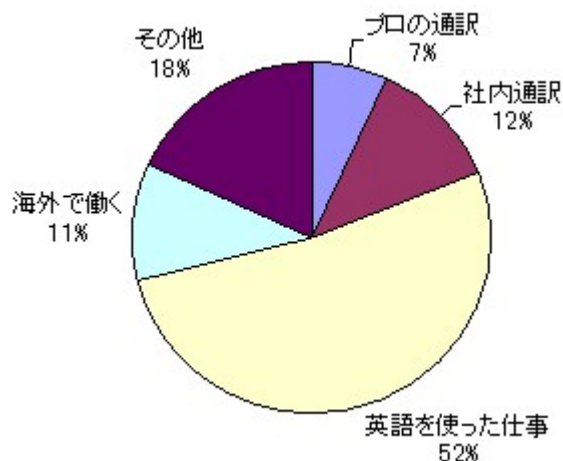


図8 卒業後の進路希望

ここでも学生たちは、必ずしも通訳者になることを希望しているから通訳クラスを受講しているのではないという事実を改めて確認する結果となった。総じてみれば、将来的にプロの通訳者にならなくとも、何らかの形で英語を使った仕事をしたいと考えている学生がほとんどである。自分の進路にとって通訳クラスで学べることが、何らかのプラスになるならば、との考えで受講を決めていることが推測される。

質問8. 他にどのような英語科目を履修しているのか

最後に、通訳クラスを受講する学生は、他にどのような授業を履修しているのか、またすでに履修してきたのだろうか。寄せられた回答の中から、代表的な科目を列挙すると以下のようなになる。

主な科目：リーディング、ライティング、リスニング、文法、英語学、音声学、パブリック・スピーキング、オーラルコミュニケーション、プレゼンテーション、時事英語、メディア英語、英語教授法、科学技術英語、英語学術表現、国際コミュニケーション、映像翻訳、英語資格対策、キャリア英語、ビジネス英語、国際経済、国際協力、英語圏研究、翻訳、観光英語、ジャーナリズムなど

このリストを見ると、「リーディング」や「ライティング」などの英語の語学学習に特化した科目だけでなく、「スピーチ」「ディベート」「プレゼンテーション」など、すでに学んだ英語力を利用して自ら英語を運用する能力を身につけるための科目や、「国際経済」「国際協力」などの国際関係科目まで、実に多岐に渡って開講されていることが分かる。学生たちは、自分の関心や興味に合わせて、多種多様な科目を履修することができるなど、かなり恵まれた学習環境にあると言える。

調査結果について

今回の調査により、通訳クラス受講生たちの意識について、いくつかの点が明らかになった。なかでも、多くの学生たちが「英語力の強化」を主目的に受講している点、および「通訳クラス＝英語クラス」と認知している点は、今後の通訳教育の行方を探る上で、見過ごすことができない問題であると考えられる。

また、今回の調査で、語学習熟度の低い学生も、多数通訳クラスを受講していることが明らかとなった。教員にとって、英語力が十分でない学生を対象に通訳の指導を続けていくのは、並大抵のことではない。中途半端な形で通訳実技を教えても、学生たちを混乱に陥れる危険性さえある。実際、通訳訓練法を援用した英語教育を行うだけでも精一杯というのが実情ではないかと思われる。

しかし、現在の日本の大学が直面する厳しい状況を考えると、今後、学生たちの英語力が飛躍的に向上するとは考えにくい。いわゆる「エリート校」に進学してくる学生や一部の帰国子女などを除いて、大半の大学では、むしろ現在よりさらに語学習熟度が低い学生たちを対象として通訳の授業を実施していかなければならないことになるだろう。このような状況の中で、あえて「通訳」の授業を続ける意義はあるのだろうか。もしあるとすれば、われわれはその意義をどこに求めたらよいのだろうか。また、今後、通訳の授業が大学教育の中で生き残り、独自の存在としてその立場を築いていくためには、どのような方策があるのだろうか。

これからの通訳教育

今後の通訳教育のあり方については、従来とは異なる、新しい「理論的枠組」が必要である、との提言が既になされている（稲生・染谷 2005）。その考えの中核となるのは、通訳教育を単なる語学訓練という狭い枠組みの中でとらえるので

はなく、通訳訓練を通して、異なる文化間のコミュニケーターとしての役割を果たすことができるような人間を育てる、という考え方である。

そもそも通訳者の仕事というのは、“making sense of what others have difficulty understanding” (Pöchhacker, 2004) ということからスタートした。すなわち、相手が分からないことを、分かるように説明するのが通訳者に課せられた使命である。そのために通訳者は、文化や習慣が全く異なる双方の間に立って、両者の立場や考えを尊重しながら、あらゆる表現方法を駆使して、両者の意思疎通を図っていく。

今後、通訳の授業においても、このような通訳者の異文化コミュニケーターとしての役割に、もっとフォーカスを当て、授業に盛り込む必要があるのではないだろうか。通訳体験は、対人意識、異文化意識を高め、異文化コミュニケーション能力を育てることができる(新崎 2007)。国際化がいつそう進む現代を生きる学生たちにとって、たとえ将来通訳者にならずとも、このような能力は社会のあらゆる現場で必要となってくる。その意味でも、今後は、もっとコミュニケーションを意識した通訳演習への取り組みがいつそう大切になってくるであろう。

さらに、これから通訳教育を担う者は、英語教育や応用言語学、認知言語学、心理学、談話分析、社会言語学といった隣接諸分野のさまざまな理論やこれまでに培われた幅広い知見などを積極的に導入し、通訳教育と関連付けていく努力も必要であろう。その上で、それぞれの教育現場の状況にあった指導法を、担当教員自らが考え、自ら提案していくことが急務と言える。学生たちの通訳クラスへの意識に変化をもたらすには、まずは教員自身が通訳の授業の特色やその価値を認識し、それを十分に学生に伝えていく努力を惜しまないことが必須であろう。

終わりに

今回実施したアンケートは、通訳教育分科会に所属する会員有志による初めての試みでもあり、通訳関連の授業を受講している学生の意識、特にそのプロフィール、およびニーズを探ることに焦点を当てて実施した。そのため、通訳教育に関する多くの疑問に答えるには甚だ不十分なものである。しかし、これまでうかがい知ることができなかった、受講生の意識の一端が明らかになっただけでも、今後、通訳教育を実践して行く上で貴重な収穫になったものと考えられる。

反省点としては、今回の調査は大学・大学院・専門学校を一括りにして実施したが、大学院生と学部生ではニーズの違いがあり、また同時に学部生でも、一般教養の枠内の通訳クラスと学部の専門科目とでは、学力も取り組み姿勢も大きく違う。これらの点を踏まえて、今後、再度調査する機会があれば、その属性に適したより精密な調査を実施する必要があるだろう。

謝辞：今回のアンケート調査の実施・報告に関しては、日本通訳学会の多くの方々にアドバイスや助言、励ましの言葉をいただいた。個人情報を守るため、お名前を記載することはできないが、協力していただいた全国の会員有志の先生方には、この場を借りて、深く感謝申し上げたい。

著者紹介（代表執筆者）：田中 深雪 (TANAKA Miyuki) 大東文化大学専任講師。日本通訳学会通訳教育分科会担当理事。コロンビア大学ティチャーズ・カレッジ修士課程修了 (MA in TESOL)。ボストン・チルドレンズ・ミュージアムの東アジア部門学芸スタッフとして展示・教育・通訳業務に従事。その後、各種会議通訳を務める。

【註】

- 1) 個人情報保護のため、今回のアンケートに協力頂いた会員有志のお名前および所属機関名は省略した。

【参考文献】

- Pöchhacker, F. (2004). *Introducing Interpreting Studies*. London: Routledge
- 稲生衣代・染谷泰正 (2005) 「通訳教育のパラダイム～異文化コミュニケーションの視点に立った通訳教育のための試論」『通訳研究』第5号：73-109.日本通訳学会
- 新崎隆子 (2007) 「異文化コミュニケーション能力の修得プロセス～通訳演習参加者の事例より」日本通訳学会第8会大会発表配布資料
- 染谷泰正・斉藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稲生衣代 (2005) 「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』第5号：285-310.日本通訳学会

アンケート

(記名式・複数回答可)

1. この授業を履修する理由は何ですか？あてはまる項目にチェックを入れてください。

- 通訳や通訳の勉強法に関心がある
- 将来プロの通訳者を目指しているから
- 英語力を高めたい
- 就職や留学に備えて
- その他（具体的に書いてください）

2. 現在の英語力についてお答えください。（大体〇〇点台でも可）。

- 1. TOEIC（点） _____
- 2. TOEFL（点） _____
- 3. 英検（級） _____
- 4. その他 _____

3. 英語力の自己評価は？あてはまる項目にチェックを入れてください。

1) 英語全般に関して

- 英語はとても得意な方だと思う
- 英語は有る程度の力はあると思う
- 英語は嫌いではないが得意とも言えない
- 英語はとても苦手だと思う

2) 英語のスキルに関して

- 英語で友達に手紙やEメールが書ける
- 英字新聞や雑誌は読んで大体の概要がつかめる
- CNNやBBCのニュースはほぼ聞き取れる
- ネイティブスピーカーの先生の講義は大体理解できる

3) 4技能の中では

- リスニングがもっとも得意だと思う
- スピーキングがもっとも得意だと思う
- ライティングがもっとも得意だと思う
- リーディングが得意だと思う

4. 海外在住、留学経験はありますか？

- 在住経験がある ～ 才まで
- 留学経験がある 高校・大学（ で囲む）

5. 今までに通訳訓練を受けたことがありますか。

- ある
- ない

6. この授業で何を学びたい、身に付けたいですか？

- 通訳の仕事や資格に関する知識
- 効果的な英語の勉強法
- 通訳技術やノウハウ
- 就職や留学に役立つ技能
- その他

7. 卒業後の進路の希望は？

- 将来プロの通訳になりたい
- 企業などで社内通訳になりたい
- 通訳にならなくても、英語を使った仕事がしたい
- 海外で働きたい
- その他

8. この授業以外にどのような英語科目を履修していますか？（大学生、院生のみ記入）

現在履修している科目： _____

これまでに履修した科目： _____

ご協力ありがとうございました。なお、このアンケートを研究目的に使用することに同意していただける場合は、以下の欄にチェックマーク をご記入ください。ただし、個人名や個人情報公開されることは一切ありません。また研究目的以外に使用することはありません。

研究目的での使用に 同意する 同意しない

アンケートを実施される先生方への注意事項

1. 原則として記名式で実施してください。個人情報保護のため、無断で学生の氏名が学外に出ないように、ご配慮ください。
2. アンケート記入にあたっては、複数回答も可能です。その場合は、学生に 1,2,3 と優先順位をつけるようご指示ください。
3. TOEIC, TOEFL スコアが不明、あるいは何らかの理由で学生が記入を固辞する場合は、担当教員のほうで把握されている、おおよその学力の目安を記しておいてください。
4. アンケートを実施された先生方は、7 月末に行われる通訳教育分科会の会合に、データをご持参の上、ご参加ください。なお、今後のデータの使用・公表に関しては、参加者の同意の下で行います。会合の日時、場所は決定次第、メーリングリストでお知らせします。